



Data

監督・脚本：周防正行

出演：上白石萌音／長谷川博己／富司純子／田畑智子／草刈民代／渡辺えり／岸部一徳／高嶋政宏／小日向文世／濱田岳／竹中直人／津川雅彦／妻夫木聡／松井珠理奈／武藤十夢／大原櫻子／中村久美／岩本多代／高橋長英／草村礼子／徳井優／田口浩正／彦摩呂

👁️👁️ みどころ

本作のタイトルから『マイ・フェア・レディ』（64年）を想定できる人は、一体どれくらい？そんな心配もあるが、津軽弁+鹿児島弁のネイティブな喋りを、言語学者のセンスはいかに京言葉に修正？しかして、行き着いた『スペインの雨』vs『京都の雨』は？

コンプライアンス万能の昨今は、こんな「賭け」もご法度だろうが、そこはエンタメ映画としてご容赦を。そして、田舎出のイモ姉ちゃんが立派に一人前の舞妓に成長していくサクセスストーリーを、『マイ・フェア・レディ』と対比しながらしっかり楽しみたい。



■□■このタイトルはどこかで聞いたような・・・■□■

社会派作品からエンタメ作品まで、何でもこなす周防正行監督の最新作は、『舞妓はレディ』。そのタイトルを聞いて、阿部サダヲが主演した、『舞妓Haaaaan!!!』（07年）（『シネマルーム13』179頁参照）と同じようなギャグ映画（？）かなと思ったが、周防監督作品ともなれば、当然何か違うはず。そこで、「やはり、これは観ておかなければ！」という気持ちで試写室に行ったが、それで大正解！

『舞妓はレディ』とは、オードリー・ヘップバーン主演の名作『マイ・フェア・レディ』（64年）と似たような発音だが、まさに本作のタイトルはその「もじり」。鹿児島弁と津軽弁の両方をネイティブで喋るイモ姉ちゃん・西郷春子役を演じるのは、オーディションで800人の中から選ばれた、本作の新人女優・上白石萌音。その設定は『マイ・フェア・レディ』の田舎娘イライザと全く同じだ。すると、続いてすぐに連想するのは、ヒギンズ

教授は？ヒュー・ピカリング大佐は？フレディは？ということだが、なるほど、なるほど・・・。

■□■『スペインの雨』vs『京都の雨』■□■

イライザに対するヒギンズ教授の言葉の訓練（なまりの修正）はメチャ厳しかったから、イライザはヒギンズ教授を相当恨んでいた。それは『Just You Wait（今に見てろ）』の曲で明らかだが、厳しい訓練の甲斐あって名曲『The Rain in Spain（スペインの雨）』の歌詞である「The rain in Spain stays mainly in the plain.」という発音ができるようになれば、しめたもの。『マイ・フェア・レディ』におけるそんな訓練風景は、相当厳しいものだった。

他方、本作に見る京大学の言語学者である京野法嗣センセ（長谷川博己）のやり方は、ヒギンズ教授に比べると格段に優しそうだ。そして、「京都の雨は大概、盆地に降るんやろか？」という歌詞の『京都の雨』が歌えるようになると、センセが若くてハンサムな分だけ春子の淡い恋心のターゲットにも・・・。『マイ・フェア・レディ』では、フレディという年相応の青年がイライザに恋心を燃やし、それなりの展開を見せたが、本作に見る京野の弟子で、京大学の院生たる西野秋平（濱田岳）は、春子に対して恋心を燃やしていない。これは、周防監督が明らかに今風の男女を意識したため・・・？

■□■若い人たちは『マイ・フェア・レディ』を知ってる？■□■

京野センセが春子のなまりを修正し、ちゃんとした京言葉を喋る一人前の舞妓に仕上げでやる、という「賭け」をしたお相手は、老舗呉服屋の社長・北野織吉（岸部一徳）。北野は、「万寿楽」を経営する小島千春（富司純子）の常連客で、いかにも金持ちのダンナ衆（遊び人）という雰囲気の間男だが、今ドキこんなダンナ衆ってホントにいるの？さらに、芸能事務所の社長だという高井良雄（高嶋政宏）も京都でのお茶屋遊びが大好きで、里春（草刈民代）にゾッコン。今ドキ、こんな風に目当ての芸妓狙いならいくらでもカネを注ぎ込む遊び人って、ホントにいるの？

私たちの世代は誰でも『マイ・フェア・レディ』のストーリーと名曲の数々を知っているから、こんなふうに両者を対比しながらの楽しみ方ができるが、さて、今の若い人たちは『マイ・フェア・レディ』を知ってる？

■□■舞妓の必須三単語とは？■□■

本作冒頭のキーワードは、「舞妓さんにしてくいやはんどかい」。これを訳せば「お願いですから、舞妓さんにしてください」だが、あなたはわかる？春子を舞妓にするため、津軽から万寿楽にやってきた春子の祖父・田助（高橋長英）、祖母・梅（草村礼子）の言葉を聞いて理解できる人は少ないはずだ。そこでは、二人の話を千春だけではなく、京野セン

セや、下八軒唯一の舞妓・百春（田畑智子）、さらに芸に厳しい姐さん芸妓・里春からも聞いていたが、春子の母親が昔京都で舞妓をしていたという説明を理解できたのは京野センセ一人だけだった、というところが面白い。

勉強には何事も基本が大事だが、センセが春子に教える、舞妓になるための「必須三単語」は、「おおきに」「すんまへん」「おたのもうします」の三つ。これは簡単なようだが、そのイントネーションは結構難しいから、正確に発音できるようになるのは大変だ。『マイ・フェア・レディ』のヒギンズ教授よろしく、と言っても今は録音・分析等の技術が格段に進歩しているから、さまざまな文明の利器を活用しながら、京野センセは春子のなまり修正と舞妓言葉の修得訓練を続けたが・・・。

■□■まずは正座から。芸ゴトの修得は？■□■

私は京都式の「お茶屋遊び」を数回経験したことがあるが、白塗りの舞妓さんや芸妓さんの「祇園小唄」をはじめとする踊りや歌、三味線を見たり聴いたりしても、あまり面白くない。また、一品ずつ上品に出てくる京風の懐石料理も、どちらかという苦手だ。焼きガニを一つずつ上品に焼いて持ってきてくれたり、鮎をキレイに焼いてくれたりするのも悪くはないが、どちらかという大皿いっぱい盛られたカニや大皿にドーンと盛られた焼肉の方が私には値打ちがある。しかも当然、お茶屋遊びの料金は高いし、京風懐石料理の値段も高い。

周防監督は、20年程前の『シコふんじゃった。』（92年）の次回作として舞妓の取材を始める中で、京都の魅力にハマってしまったようだ。さらに、「舞妓」とは？「芸妓」とは？「お茶屋」とは？そんな興味を持ち、「花街」を歩き、「お茶屋遊び」を続ける中で、心の底から「京都」を楽しんだようだ。その結果、「遊びつくす」ことは到底できないと悟り、「リアル」な花街ではなく「ファンタジー」としての花街を描く方針で本作に臨んだようだ。しかして、本作にはそんな周防監督流の、ファンタジー色あふれるお茶屋遊びの楽しさがいっぱいだ。

そんなお茶屋遊びを支える舞妓の修行は、まずは正座から。また、芸ゴトの習い事は、三味線、長唄、鳴り物等々たくさんある。春子の音楽的センスがどれくらいあるのかは知らないが、さて、春子は京野センセによる舞妓言葉の修行だけではなく、これらたくさんの芸ゴトをいかにして修得・・・？

■□■本格的ミュージカルでないところがミソ・・・？■□■

本作で芸妓・里春を演じる草刈民代は世界的バレリーナだから踊りは何でもOKだが、さて歌は？また、30歳という舞妓にしてはちょっと老けすぎの百春役を演じた田畑智子も演技力は抜群だが、さて歌は？他方、男優陣も、園子温監督の『地獄でなぜ悪い』（13年）で存在感を見せつけた京野センセ役の長谷川博己（『シネマルーム31』247頁参照）

や、男衆を演じた、とにかく芸達者な竹中直人の歌や踊りのレベルは？そして何よりも、本作で女優デビューした春子役の小白石萌音の歌と踊りのレベルは？

それらがすべてプロとして超一流のものかどうかは別として、本作は『マイ・フェア・レディ』をもじっているものの、『マイ・フェア・レディ』と同じような本格的ミュージカル映画ではない。つまり本作は、歌や踊りの楽しい要素は入っている（それは、イコールある観客にとっては違和感がある）が、そのウエイトはあまり大きくなく、あくまでちょっとのお楽しみ程度、とされているわけだ。それについて周防監督はプレスシートの中で、「旨い歌を聞きたいのであれば、歌手の歌を聞けばいい。でも役者の歌にはそれぞれの個性、役柄がにじみ出てくるので面白いんです。それは『Shall we ダンス？』で役者たちが見せてくれたダンスで思い知らされました。役者にしか出せない味わいがあるんですよ」と語っている。ストーリー展開の途中で突然歌と踊りに切り替わると、観ていると多少気恥ずかしい気持ちになるが、そんなものは無視して、個性派俳優たちの（上手いかどうかは別として）場面に応じた個性的な歌と踊りをタップリ楽しみたい。

■□■試験官は？そして、合否は？■□■

本作はクソ難しい社会派ドラマ、問題提起作ではなく、あくまでエンタメ作だから、サクセスストーリーとしての結論は途中からミエミエ。したがって、演出のテクニックはそのミエミエの結論まで、いかに観客をワクワクさせながらもっていくかに絞られる。しかして、春子の舞妓デビューの合否を判定する試験官になるのは、「万寿楽」の馴染みの客（津川雅彦）。京野センセが「賭け」をした相手の北野織吉ではなく、この馴染み客にしたのは中立性を保つための当然の措置だが、彼はお茶屋遊びの相当なベテランだけに、その役目にはうってつけ。津軽から出てきた時は、花売り娘のイライザと同じようにイモ姉ちゃんだった春子も、今は立派な貴婦人に成長したオードリー・ヘップバーン演じるイライザのように、京言葉はもちろん、踊りも立派ならお客さんとの会話も一人前に。この「試験」に合格すれば、それまで「ごきぶりさん」と揶揄され、多少肩身の狭い思いでお茶屋遊びを続けてきた京野センセも、これからは堂々と（北野織吉のおごりで）お茶屋遊びができるようになるわけだ。

本作では、下八軒にある千春のお店「万寿楽」が撮影の中心となっているが、そのために作られたオープンセットは風情がある。もちろん、下八軒は上七軒をもじった架空の名前だが、祇園、宮川町、上七軒等、お茶屋が建ち並び、舞妓・芸妓が行き交う京都のまちの姿が見事に再現されている。しかして、本作のクライマックスは、今や立派に一人前の舞妓に成長した春子が、舞妓姿のまま飛んだり跳ねたりしながら歌うエンディングになる。多くの登場人物たちをバックに引き連れながら春子が踊り歌う『舞妓はレディ』は、宝塚歌劇のフィナーレを彷彿させる楽しいものだ。エンタメ映画はこうでなくちゃ。周防監督、楽しい映画をありがとう！

2014（平成26）年7月10日記